

泥んこの詩集

大林・清

泥んこの詩集

(乱丁・落丁の場合はお取替え致します)

昭和二十九年五月十日發行

定価二百五十円

地方定価二百五十五円

著作者

大林

清

発行者

大野泰子

印刷者

磯貝兌雄

東京都文京區大塚坂下町五七

発行所

東方社

電話大塚一八七三番
振替東京五七七四番

小長
説篇

泥
ん
こ
の
詩
集

大
林

清

目次

初恋	女の弱点	虎の檻	征服慾	幻の女	灰色の青春	さまよいの女	銀座裏	未知の世界	深夜の記憶	描く幻影	灰色の道	めぐりあいて	俄か芸者	喰の顔
----	------	-----	-----	-----	-------	--------	-----	-------	-------	------	------	--------	------	-----

5	12	16	21	25	29	34	39	44	48	53	57	62	67	71
---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

娼婦の素顔	野獣の犠牲	泥沼	破られた頁	座敷中	都会議女員	闇報酬	運命の暗示	女の生きる道	その夜の潔白	泥濘の道	恐怖の客	岐路	昨日の今日	慄える唇	雑草は刈るべし
-------	-------	----	-------	-----	-------	-----	-------	--------	--------	------	------	----	-------	------	---------

76	81	86	91	96	101	106	111	119	124	129	134	138	142	147	152
----	----	----	----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

落し穴 星空の下 忘れぬ肌 偽電報 夢消えし 逢うは別れの 恐怖の男 涙とともに 深夜の酒場 純潔問答 仇敵 父の哀願 ネオンの町で 生活の戦場 ニューフェイス 無気味な好意

226 22 215 212 208 204 199 194 189 184 180 175 171 166 160 156

黒い影 私設秘書 黄金の呪縛 囹にされる女 蔭の顔 脱出 火の抱擁 伊東の宿 魂なき肉体 広場の夜風

装幀
佐藤泰治

274 270 264 260 255 251 247 241 236 232

初　　恋

誰がどこから燃料を持つて来たのか、東京駅乗車口前の舗道で、焚火が燃えはじめた。

丸ビルも中央郵便局も、今はことごとく窓の灯を消して、暗い夜空にそそり立つて見える。

杉山吾郎はオーバーの襟を深く立て、焚火に手をかざしていた。もう一と足のところで、中央線の終電に乗りおくれたのだ。ほかにも同じ乗りおくれ組と、早朝の客を待つタクシー運転手とで七八人、それからもう一人、これはどうしたのか、ナイロンのボストンバッグを大事そうに手もとへ引きよせた若い女が、この連中から少しはなれて、吾郎のななめ後にうずくまつていた。

さつきから雑談に花を咲かせているのは、運転手連中であつた。中華ソバやおでんの屋台がどこからともなく寄つて来て、腹をこしらえたり焼酎をひつけかけたりする者が出来ると、雑談はいつそう活氣づいた。

「ボリが来たぞ、ボリが」

誰かがそう注意した。

「パンちゃんいないな、今日は」

そう云つて見まわす者もあつた。

建築現場の深夜作業に立会つたりする關係で、時々この徹夜組の仲間入りをする吾郎は、警官がパンパンにやかましいのを知つていた。たまたまお茶つ挽きのパンパンがまじつていたりする時は、運転手連中がタクシーや公衆電話のボックスへ隠してやるのを見たこともある。

警官はこの山賊めいた一団のそばまで来て足をとめた。

「御苦勞様です」

すかさず近くにいた運転手の一人が云つて、煙草の箱をさし出した。

「一本おつけなさん」

「やアありがとうございます」

警官は一本取つて、これもさし出されたマッチの火で吸いつけ、吾郎の後へまわつて來た。

「あなたも乗りおくれですか」

若い女にきいたのだ。

「そうです、僕のつれですよ」

そんな場合のために用意していた言葉を、吾郎はすぐ口にした。

警官は吾郎と女を見くらべ、

「寒いから風邪をひかないように」

誰にともなく云うと、降車口の円屋根の中へ入つて行つた。

「変つたもんだな、ポリ公も」

「昔だとすぐオイコラだ」

中断していた雑談がまたはじまつた。

吾郎はそれを待つて、後の女をふりかえつた。

「女の人にはうるさいんですよ、だから僕のつれだつて云つたんです」

「済みません」

女はやつと瞬に落ちたように頭を下げた。かくべつ化粧はしていないらしいが、眼の大きな、少し腺病質そうに見える美しい顔立であつた。

「あなたも乗りおくれたんですか」

「いえ」

女はおどおどと眼を泳がせながら首を振つた。

「ああそうか、朝早い汽車に乗るんですね」

吾郎が勝手に飲みこむと、

「人と待合せをしておそくなつたんですの」

女は困つたように答えた。

「そうですか」

それ以上たずねるのもおかしかつたので、吾郎はだまつてしまつた。

その時、円屋根の中から、一人の男がふらつく足もとを踏みしめながら出て来た。今の警官に起された酔漢なのだろう。焚火のそばまで来ると、一とわたり見廻してから、吾郎の横へ割りこんだ。

「旦那、どちらまでお帰りです」

運転手の一人が、その男の風采のいいのを見て、機敏に声をかけた。

「中央線だよ」

投げ出すように云つて、男は隣の若い女に眼をつけた。

「あんたどこへ帰るの？」

「……」

女は脅えたようにしりごみした。

「中央線なら送つて行こう、どうせ一人乗るのも二人乗るのも同じだからね。僕は萩窪なんだ

が……」

鼻下に髭のある四十男であつた。

「萩窪ですか？」

女の眼がさがるような色をうかべた。

「そう、あんたも萩窪？　恰度いい、おい、タクシイやつてくれ」

「あの、でも、あたし……」

「いいんだ、いいんだ、遠慮することはないさ。おい、早くやれ」

男がもどかしそうに手を振つた時は、もう近くの一合がエンジンの音をたてていた。

吾郎は義憤を感じた。果してこの鉄面皮な四十男が、女を行先まで無事に送りどけるかどうか疑問であつた。

「やめた方がいいんじゃないですか、もう三時間もすりや一番電車が出ますよ」

女に云つたつもりだつたが、

「雲助の仲間入りはごめんだよ。さア、あんたを送つて帰ろう」

男は女をせきたてた。

吾郎の家は吉祥寺なのだ。もし懷中に金さえあれば、少しぐらい無理をしても、女を自分がタ

クシイで送つて、降りかかるかも知れない危険を、未然に防いでやれるだろう。が、今夜の持合せは百円札二三枚に過ぎない。

「じゃ、済みませんけど……」

女は中年男の誘いに屈してしまつた。

吾郎には、それをどうすることも出来なかつた。

タクシイは二人を乗せると、交通整理も何もない深夜の駅前広場を、まっしぐらに走りだした。

「畜生ッ、いい拾い物をして行きやアがつた」

会社員風の男が、いまいましそうにつぶやいた。

「金さえありやア何だつて出来るんだ、女なんかいくらだつて落ちてるんだもんな」

吾郎が感じたのと同じ危惧を、その運転手も感じたらしい。

金さえあれば——そうだ、金こそ人間の持つ力の象徴なのだ。オールマイティだ。こんな街頭で、吹き溜められた木つ葉のように夜を徹しなければならぬのも、所詮は金がないからである。

吾郎はうそ寒さが身に沁みて、毛のすり切れたオーバアの襟へ、一層深く顎を埋めたが、その

眼がふつと、今の女の立つたあとに、一冊の本の落ちているを見た。小型の文庫本で、頁がひらかれたままになつていた。

吾郎は何気なく手にとつてみた。詩集らしかつた。ひらかれた頁には「初恋」と云う題の詩が読めた。

まだあげ初めし前髪

林檎のもとに見えしとき

前にさしたる花櫛の

花ある君と思ひけり

やさしく白き手をのべて

林檎をわれにあたへしは

薄紅の秋の実に

人こひ初めしはじめなり

詩はまだつづいていた。

本の標題は「島崎藤村詩集」——裏表紙をかえしてみると、端に小さくペンの文字で、「大隅三津子」と書いてあつた。

女の弱點

東京に不案内な大隅三津子には、自動車がどのあたりを走っているのか皆目わからなかつた。もう午前三時にもなる街は、どこも同じ表情をしていた。頭を後へもたせ、さつきから眼をとじていた男は、急にその頭を起した。

「ちよつと待つてくれよ運ちゃん、次の角を左へまがつてくれないか」

「ここはまだ新宿ですが……」

「いいんだよ、この時間に荻窪までは無理だ、そこんどこまがつてくれ」

二人の会話を聞いていて、三津子は不安になつた。

「どこへ行くんですか」

「まづいいからだまつていたまえ、悪いようにはしないよ」

男は押しつけるように云い、何と思つたか、内ポケットから名刺入を出した。

「僕はこう云う者だ、社会的地位もある、信用してもらつてもいい」

つきつけられた名刺を手に取ると、星野商事株式会社社長と肩書があつて、名も星野某と刷り込んであつた。

「そこだ、そこで、ストップ―」

星野の指示通り、タクシイは小暗い横丁を折れたところでとまつた。

星野はさつさと下り立ち、五六歩行つた先の、洋風の建物の玄関に立つた。その上には「ホテル・トキワ」と赤いネオンがともつていた。

タクシイが引きかえして行つて、男と二人きり取り残されると、三津子はたまらなく心細くなつた。

「あたくし失礼しますわ」

「何を云つてゐるんだい。今頃若い女が一人でうろついていたら、お巡りの不審訊問にひつかかるか、不良につかまるのがおちだ。ここで一と休みしているうち夜が明けるから、そうしたら狹窄まで送つてあげるよ」

そう云う間も、星野と云う男はベルを押しつつづけた。

三津子の心がきまらないうち、玄関に灯影が射し、ドアが細目にあいた。

「俺だよ、朝までたのむ」

星野が顔を突き出すと、

「いらつしやいます」

ねむそうな声がして、寝間着姿のしどけない恰好の女が、三津子のほうをうかがつた。

「部屋あるんだろう」

「どうぞ」

「おい君、心配せんで入れよ、知合いの家なんだ」

手招きして、星野は中へ入つた。

三津子もそのあとに従うよりほかに、いい智恵がうかばなかつた。

靴をスリッパにはきかえると、今度は三津子が先へ立たされた。せせこましい階段を二階へあがつて、寝間着の女が一室のドアをあけた。

「こちらでよろしいですか」

「ああ結構、ともかく朝までいらればいいんだ」

三津子の眼の前で、室内が明るくなつた。室内の大半を占めている寝台を見て、三津子がしりとみしようとする、後から強く背を突かれた。よろめきこんだ途端、星野はドアをしめ、鍵の

音をさせた。

三津子の心臓は、ふいに破れそうに鳴りはじめた。

「さア寝よう」

星野はオーバアと上着をいつしよにぬぎ、チヨッキのボタンをはずした。

三津子はものを云わずドアへ飛びついたが、鍵のおろされたドアは、ノックをまわしても前後に揺すぶつても無駄だった。

「ははは、何をしてるんだ。子供じやあるまいし、満更こう云うところを知らん訳じやなからう。早く寝てあつたまれよ」

星野はシャツもズボン下もぬぎ、用意されていた浴衣を着て、寝台へもぐりこんだ。

「ほら、鍵はここにある」

からかうように云つて、ドアの鍵を枕の下へさし入れる様子であつた。

「帰して下さい！ 困るんです！」

三津子は恐怖で膝頭を慄わせ、泣声になつた。

「驚いたな、君はまだ子供なのかい。あの時間にあんなところにいて、猫をかぶつたつて駄目だよ。入つて来ないと先へ寝るぞ」